

第2章 銃後

子どもたちの生活

じゃが芋とかぼちやが主食の日々

加藤長市さんのお話から

○配給 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。砂糖・マッチの切符制の導入が最初。米については昭和十六（一九四一）年に始まった。

○焼夷弾 火災を引き起こすために作られた爆弾。

○供出 国などの要請に

私は、中富良野の東四線というところで生まれ、姉や妹に囲まれて育ちました。父は、炭鉦が華やかな頃でしたので住友石炭鉦業株式会社に就職し、赤平に住むことになりました。石炭は配給になったので、燃料には事欠きませんでした。物のない時代で、生活そのものは豊かではありませんでした。また、戦争の真っ最中でしたから配給生活でした。お金だけではなく配給される切符がないと物が買えなかったのです。じゃが芋を絞った残りかすのでんぶんかすを買って、小麦粉をこねて団子にして食べたこともありました。お米の中に豆を入れたり、じゃが芋を切って入れたりして食べたりもしました。親戚の農家にお米をもらったり、土地を自分で開墾してトウモロコシやかぼちや、じゃが芋などを作ったりして食べることも多かったのです。近所の人から見たら、食べるものは比較的楽だったかもしれません。父が水田を作って、米を育てたこともありました。子どもが多かったので、両親は子どもに食べさせるためにがんばったのではないかと思えます。

学校の体育の時間には、腹ばいになって手足で進むほふく訓練を行ったり、一生懸命木刀の練習をしたりしました。また、焼夷弾を落とされたときの身の伏せ方も習いました。

戦争中は給食がなく弁当をもっていきましたが、弁当がじゃが芋だけとか南瓜だけという子どももいて、周りに見られたくないのか、かくして食べたりしていました。とてもひもじい生活でした。

また、鍋や釜を含めた金属製品やアルミニウムは軍に供出しました。川の橋の欄干の鉄など

よって物資を差し出すこと。特に、民間の物資、主要食糧農産物などを、一定の価格で半強制的に政府に売り渡すようにさせることをいう。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように広角度に発射すること

○防空訓練 防空演習のこと。空襲を想定して、被害を最小限にいくとめるためにおこなった訓練。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○垂木 屋根を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材。

も持っていかれました。ぜいたくは敵だといつて、指輪、ネックレスなど貴金属も出しました。

赤平は田舎でしたが、一度、上空を戦闘機が通過して、富良野の駅が機銃掃射されました。また、防空訓練は、夏は土を掘って、冬はかまくらで行いました。防空壕は、土の下に穴を掘って垂木の板を渡して作りしました。一つの穴に一家族が入りました。敗戦近くになってから掘りましたが、剣先スコップで掘りました。それだけは供出ししないで、隠しておいたのです。つるはし、なた、まさかりもです。これらは、燃料を作るために必要でした。

弁当箱は木で作りました。わらで、おにぎりを入れるようなものも作りました。わら靴も作りました。ゴムの長靴はなくて、配給があってもクラスに一足ずつぐらいでした。それはあまりよくないものでしたが、兄や姉がいる人は除いて、ゴムの長靴を持っていない

じゃが芋とかぼちゃが主食の日々



アメリカのグラマン戦闘機

イメージ図

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

人でくじ引きをしました。また、洋服の袖口が鼻水でテカテカしていたり、つぎを当てたりしている子どももいました。

当時、私たちは小さい子を**お**ぶったまま遊んでいました。両親は農作業で忙しく、母は稲刈りをよく手伝いに行っていました。稲刈りや草取りは二、三十人の集団です。赤平に行つてからも、祖父**い**ほの家に行つて手伝っていました。

住友は大きな会社でしたから、アメリカ人の捕虜や中国人の労働者、それから朝鮮の人たちがたくさんいて、石炭の仕事をしていた。

そして、昭和二十(一九四五)年八月十五日。夏休みのかんかん照りの時に、学校に呼ばれて、校庭に整列して玉音放送を聞きました。初めて天皇陛下の生の声を聞きました。前に座っていた先生方が泣き出したので、「どうしたのだろう。」と思いました。戦争が終わったということではっとした感じがし



玉音放送を聴く人々

イメージ図

○復員 戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くこと。また召集を解かれた兵士が帰郷すること。

○国民学校 昭和十六(一九四一)年の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した、皇国民の育成をねらいとする教育機関。

○援農 日本全国で十二才から十五才の中学生が働き手の男性が戦場に行つて手薄になった農村に働きに行ったこと。

たのを覚えています。

戦後の復員列車はぎゅうぎゅうで、あみだなにも人が乗っていません。切符を買うために、朝早くから並びました。

炭鉱では、中国人労働者を虐待していた日本人の監督は逃げてしまいましたが、気持ちの優しい日本人もいて、中国人労働者を家に呼んで食事をさせたりした人もいたようです。

昭和二十二年には、国民学校の高等科が新制中学校になりました。当時は援農で農家に行つたり、近くの空知川から砂と泥を持ってきたりして学校で土管を作ったりしました。まともに勉強はしませんでしたが、みんなでいろいろなことを助け合いました。

今の子どもたちには、こういった戦争の悲惨さや、そのような時代があったからこそいま幸せに暮らしているということを改めて考えてほしいと思います。人の痛みを感じられる人になつてほしいです。

何のために戦争したのかなと今でも考えています。私のいとこは、沖縄で米軍と戦つて亡くなり、慰霊碑に名前を刻まれています。戦地には、今も、いくつもの人骨が眠っています。

戦争は二度とするべきでないと思います。

DATA

平成23年度豊平区平和事業
聞き取り

- ・平成23年10月24日
- ・豊平区体育館



加藤長市(かとう・ちょういち)さん

- ・昭和7(1932)年生まれ
- ・札幌市豊平区在住